❖ 講演会・研究セミナー ❖

明治・大正期の龍谷大学関係雑誌

「反省会」興亡史 (1) 草創期・拡充期

- (2) 転換期・混乱期・衰減期
- (1) 2023年5月15日(月) 17:15~18:45
- (2) 2023 年 5 月 22 日 (月) 17:15~18:45 オンライン開催 (Google Meet)



※ 概 要 ※

2023 年 5 月 15 日 (月)・22 日 (月) の二回に分けて、龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門の常設研究班「仏教史・真宗史総合研究班」(代表:文学部歴史学科 中西直樹教授)主催、明治・大正期の龍谷大学関係雑誌に関する研究セミナー「「反省会」興亡史」をオンライン形式で開催した。併せて、2023 年 5 月 9 日 (火)~5 月 27 日 (土)の間、龍谷大学大宮学舎東黌 1 階ロビーにて、写真パネル展示「「反省会」と関係雑誌の歴史」を行った。司会は近藤俊太郎氏(龍谷大学非常勤講師)が担当した。

中西氏によると、1875 年に真宗本願寺派が設置した普通教校の学風は進取に富んだものであったと言われ、学生の主体的なサークル活動も盛んであった。なかでも、反省会はその代表的存在であり、禁酒・禁煙の普及を通じてモラル向上の啓発に努め、会員との財政・人権・文明・教育などについての意見交換の場として、機関誌『反省会雑誌』(のちに『反省雑誌』と改題)を創刊した。雑誌を通じて反省会の趣旨に賛同する者は急増し、やがて最盛期に2万人の会員を擁する全国的な巨大組織に発展していった。

一方、『反省雑誌』は、1899年に『中央公論』と改題され、日本を代表する総合雑誌に発展して今日に至っている。このことはよく知られているが、反省会の実態とその歴史について取り上げられることは少ない。その原因には、反省会の歴史が、急速かつ複雑に変転する龍谷大学の前身校と密接に関係しており、理解しにくい点を挙げることができると考えられるという。

本研究セミナーでは、中西氏は、普通教校・文学寮・高輪仏教大学へと変遷する龍谷大学前身校の学校系統との関係を軸に、まず「普通教校設置とその理念」「反省会設立の経緯」を説明し、ついで以下の五期に分けて反省会の興亡史を概説した。

第一草創期(普通教校期) 1886 (明治 19)~1888 (明治 21)年

- (1) 普通教校学生の学内団体としての性格が強い
- (2) 1888年4月頃から会員勧誘活動展開

第二拡充期(文学寮前期) 1889 (明治 22)~1892 (明治 25)年

- (1) 普通教校学生の東京進学(2系統の仏教青年会運動)
- (2) 地方での会員急速拡張(吉丸徹太郎)
- (3) 反省会内(本部と地方)の軋轢表面化
- (4) 中西牛郎の新仏教論の影響大(後に失脚)

- (5) 玉本町に出版体制整備(反省会本部・海外宣教会・新報社・興教書院・令徳会 雑誌部)
- 第三転換期(文学寮中期) 1893 (明治 23)~1897 (明治 30) 年
 - (1) 島地黙雷会長の下で本部役員の刷新・地方支部の再編(羽田荷生の地方巡回による拡大路線)
 - (2) 宣教部設置→1895年以降、会員拡大路線の転換
 - (3) 教育部設置(文学寮予備校)
 - (4) 『反省雑誌』の誌面充実→反省会の活動記事減少→反省雑誌社の東京移転(反省会からの分離促進)
- 第四混迷期(文学寮後期) 1898 (明治31)~1900 (明治33) 年
 - (1) 『反省雑誌』=『中央公論』と改題、総合雑誌に発展、反省会との関係断絶
 - (2) 反省会副会長・文学寮長の薗田宗恵=反省会との連携を深め文学寮の文部省認可中学校への昇格を企図
 - (3) 文学寮校友会誌『松籟』、反省会本部機関誌『反省』の創刊、反省会慈善部新設
- (4) 保守派の妨害→99.6 薗田北米へ(文学寮長退任)→文学寮・反省会の活動停滞 第五衰滅期(東京移転前後) 1901 (明治 34) ~1904 (明治 37) 年
 - (1) 学校条例発布により文学寮消滅
 - (2) 東京に高輪分教場(後の高輪仏教大学) 開設後に反省会も東京移転
 - (3) 反省会=高輪仏教大学の校友会に付随する形式で存続→高輪仏教大学の廃校と ともに消滅